西南学院大学　人間科学論集　第７巻　第１号　　139 ― 162 頁　2011 年８月

ノンクリスチャンによる キリスト教保育の課題

―「キリスト教シンパ」と「キリスト教的空間」―

深　谷　　潤

Eine Betrachtung von christlicher Erziehung im Kindergarten und Kindertagesstätten bei Nicht-Christen

Jun Fukaya

はじめに

今回、ノンクリスチャンが多数を占める現場で、キリスト教保育が展開していくための１つの試みをお話いたします。内容は大きく５つあります。第１に、現状を知る１つの資料として、2006 年のキリスト教保育アンケート報告を紹介します。第２に、2010 年夏に発刊された「新キリスト教保育指針」のねらいについて紹介します。第３に、ノンクリスチャンとクリスチャンという２元論的分け方ではなく、もうひとつの「キリスト教シンパ」という在り方について説明いたします。第４に、従来からある「望ましい保育者像」を振り返り、保育の専門性について考えます。第５に、ノンクリスチャンによるキリスト教保育の課題として、園がキリスト教的空間として位置づけられることの意義とその方法について考えます。最初の２つは、原理的な話であり、第3，４点は教師に関わる話、第５は課題解決の方法についての話です。

１．キリスト教保育アンケート報告（2006 年）

2004 年実施されたキリスト教保育連盟のキリスト教保育研究委員会アンケート調査によると、(2004 年７月、夏期講習会参加者 1000 人対象、回収率

約 90%、876 件）キリスト者保育者の割合は、27.2% で、専任保育者 3306 人中 880 名でした。これは、1981 年の調査と比べ、20% 以上クリスチャンが減少したことを意味します。（47.8%、2222 人中 1060 名）つまり、キリスト教保育の現場では、ノンクリスチャン教師が 4 人中 3 人いることを意味します。ノンクリスチャンによるキリスト教保育の実践が既成事実となり、現場での対応を余儀なくされている実態が見えてきます。

クリスチャンだからキリスト教保育を目指した者は、23.9% います。年齢別には、50 代が 55.2%、40 代が 31.7%、30 代 20.9%、そして 20 代が 8.1% です。「20 代のキリスト者の少ないことは、青年層へのアプローチに問題をもつ教会の現状を反映している。」（p.109）とアンケートは分析しています。

さらに、アンケートの項目の中で注目されるのは、「信者・未信者の保育に対する共通点・相違点」です。最も顕著だった共通点は、「キリスト教保育の特色」として「一人ひとりの存在を大切にする。」の割合が、クリスチャンでは、88%、ノンクリスチャンでは、86% でどちらも極めて高い割合を占めました。さらに、「保育を目指した理由」としてクリスチャンでは、「キリスト教保育に共感したため」が最も高く 55.3%、ノンクリスチャンでは、36% で 2 番目に高い割合でした。（ノンクリスチャンの第 1 位は、求人があったから 39.9%）次に、最も顕著だった相違点は、「キリスト教保育の特色」の中で、「信仰に基づいて子どもと関わる」がクリスチャンでは 64.6%、ノンクリスチャンでは 20.2% と大きく値が異なりました。さらに、幼児礼拝で大切にしていることを尋ねる項目では、クリスチャンでは、「保育者自身の礼拝への思いや準備」が最も高く、61.5%、それに対しノンクリスチャンは、「礼拝の雰囲気」61.2% となっています。

これを、2009 年の九州部会の保育者研修会で紹介したところ、ノンクリスチャンの保育者の一人がショックを受けたそうです。自分は、礼拝への思いを大切にしてきたつもりだったが、アンケートでは、そうではなく、「雰囲気」を大切にする点が目立った、という結果がでたからです。その人は、自分の礼拝への思いが否定されてしまった、と思われたのかもしれません。決してそんなことを意図したわけではないのですが、公に告白する信仰と個人的な思いの違

いがここに出ていると思います。

2．新キリスト教保育指針の特徴

2010年7月、10年ぶりに発刊された『新キリスト教保育指針』(キリスト教保育連盟発行）は､従来の読者層であったクリスチャンの保育者だけではなく、むしろノンクリスチャンの若い保育者を強く意識して書かれました。特に今回の指針は、主に2つの点が異なります。第1に、ノンクリスチャンの保育者にもわかりやすいように内容や表現を心がけたことです。第2に、保育者と保護者、さらに地域や小学校、そして子どもとの連携を強調し､「共に創り出す」保育を目指している点です。子どもの園での様子を情報発信することの大切さや保護者を支援し、保育に参加することの意義など、園と家庭の両者が協力し合って子どもの成長を見守ることが書かれています。従来からあった園に対する教会の役割の部分は強調されていないのですが、教会の礼拝を大切にすることには触れています。

実は、ある会合で、さっそく一人の牧師からこの「新キリスト教保育指針」に対するご批判を頂戴しました。その論点は3つありました。まず、①何の前触れもなく、突然指針が出されてきた印象がある。もっと広く意見を集約してから出すべきだ。②神学的に浅いのではないか。（別の牧師から、神学者に一度目を通してもらってから語句を修正して出したらどうか。）③指針では、どんな保育を目指そうとしているのかが、はっきり示されていない。などです。最初の2つの批判については、私は反論する立場にはありません。ただ、2点目については、ノンクリスチャンにわかりやすい表現をとることは、神学的な専門用語を用いないことにつながり、それが、牧師や神学者たちの不満になったのかもしれません。本当に神学的に深い内容は、やさしい表現にすることも可能である、とある牧師は主張しました。それはその通りだと思います。しかし、同時に、牧師たちの意識に従来からある考え、つまり、保育を幼児教育・保育を宣教の手段と考えるスタンスはあまり変わっていないのでは、とも思いました。第3点については、もう少し丁寧に指針を読んでいただければ解ける誤解であると思います。そして、昔からある、いわゆる「上から与えられる」

指針の発想を転換していただく必要があります。「あとがき」に奥田和弘委員長が書かれているように、指針は「ガイド」であり、保育を共に考え、自ら創り出すことの大切さが、指針全体を通して強調されているからです。

今回は、私が主に関わった第１部を中心にキリスト教保育のねらいを最初に簡単に説明いたします。

まず、キリスト教保育の定義は次のように書かれています。

キリスト教保育とは、

子ども一人ひとりが、神によっていのちを与えられた者として、イエス・キリストを通して示される神の愛と恵みのもとで育てられ、今の時を喜びと感謝をもって生き、そのことによって生涯にわたる生き方の基礎を培い、共に生きる社会と世界をつくる自律的な人間として育つために、保育者がイエス・キリストとの交わりに支えられて共に行う意図的、継続的、反省的な働きである。

一言でいうならば、キリスト教保育は、イエス・キリストに支えられながら行う保育のことです。その意味には、天地創造から始まる聖書物語のエッセンスが詰まっています。保育の目的は、共に生きる平和な世界をつくることであり、また、そのために、神から与えられたかけがえのない子どもたちの命を育て、自律を促すことです。

次に、**保育者にとってのキリスト教保育**　の項目（p.20）を紹介いたします。

> かつてキリスト教保育は、キリスト教信者によって担われてきた。しかし今日では、キリスト教保育を大切にしたいと考える信者と未信者との協働によって担われている。未信者の保育者が、キリスト教保育の場に対してもつ思いは、その雰囲気のやさしさや温かさであり、祈りをもって保育が行われていることである。また、未信者の保育者で幼少時代にキリスト教

幼稚園・保育園で育ち、そこでの経験が自分の成長に大きな影響を与えていることを自覚している人が多い。子どもも保育者も神の恵みと愛のもとで生かされ、共に育つことを喜びとする園の思いが、やさしさや温かさを醸し出していると言える。子どもと保育者、そして神の三者の関わりによってキリスト教保育は展開される。

この三者の関わりの最後に、「子どもから保育者へ」があります。それが、保育者をさらにキリストへつなげる出発点になる、と私は考えています。

神と保育者と子ども

保育者は、子どもを保育する立場でありながら、実は子どもと同じように、神によって受け入れられている存在でもある。保育者も神によっていのちを与えられた存在であり、神の愛によって生かされている者として、子どもと同じ地平に立つ。自分をそのように理解することによって、子どもより優位な立場になりがちな大人・保育者の立場が転換される。神に愛されていることを知ることは、人を許し、思いやり、受け入れる意識や態度を養う出発点となる。

保育者から子どもへ

保育者は神に愛されていることを自覚することによって、自分と同じように神の愛のもとにある園児を自分に託された者として受けとめ、そこから保育に関わる姿勢や願いが与えられる。自分が赦され、受け入れられている意識がなければ、他の人を許すことも受容することも難しい。実際に、保育の中で生じる様々な困難や問題も、合理的判断だけで解決できないことも少なくない。園児も、保護者も同僚をも受け入れるためには、自分が愛されていると自覚することが大切となる。

子どもから保育者へ

保育者は、保育の中で子どもに愛を与えていると思いながらも、逆に、子ど

もを通して神の愛を感じ、受け取ることが折にふれてある。子どもの笑顔や元気な様子、毎日の様々な変化や成長は、保育者の励みとなり、仕事の疲れを癒し、心を充たす源となる。子どもは、本人の自覚なしに、神の導きに生かされていることを生活の中で表している。子どもの明るさや活発さ、笑顔の背後に神の恵みを見出す保育者の感性は、子どもとの関わりを豊かなものとする。子どもは、自らの姿を通して神の愛を大人に気づかせる役割を果たしている。

この下線部分を、私は最初、次のように書いていました。

子どもが発する光は、月のように、太陽の光を映し出している。

ある編集委員から、この表現だけ比喩的になっていてバランスが悪い、と指摘されました。そこで先ほどの表現に修正したのですが、個人的には、太陽と月の光の比喩が気に入っています。プラトンの「国家」の中にある洞窟の比喩をもじったわけではありませんが、人間は善を直接みることはできないので、光や影を通して間接的に認識するしかないのです。子どもは、神ではありません、また自覚的なクリスチャンでもありません。しかし、イエスがいったように「子どものように神の国を受け入れる人でなければ決してそこに入ることはできない」（ルカ 18：17）のであり、子どものもつ特性の大切さを聖書は語っています。この点に関して、バルト神学の立場から、実際の子どもの属性ではなく、出来事として、子どもはあくまで比喩とみなすべき、と解釈する学者もいます。私が理解する限りでは、子どもを、神の国を受け入れ・実現する存在としてのモチーフとすることが、ノンクリスチャンの保育者にまず求められることだと思います。

指針では、キリスト教保育の意味や目的を具体的に保育の中で実践していくために、6 つの目標を「ねらい」として掲げています。ねらいの各項目について、簡単に説明いたします。

（1）子どもが、自分自身を大切なひとりとして受け入れられていることを感じ取り、自分自身を喜びと感謝をもって受け入れるようになる。

ここでは、子どもをあるがままに受け入れるために、保育者自身が、自ら受け入れられた経験をもっていること、さらに、自分の存在を深いところで支え、受けとめてくれる神様の存在を感じることが重要です。

（2）子どもがイエスを身近に感じ取ることを通して、見えない神の恵みと導きへの信頼感を与えられ、「イエスさまと共に」毎日を歩もうとする思いをもつようになる。

聖書の中のイエスの話や、行為、生き方を通して、神の存在や愛を知ることができること、さらに、それらの話を子どもに保育者が語ることによって、子どもたちにイエスを身近に感じさせることができます。また、子どもと共に祈り、賛美し、礼拝を守ることによって、ノンクリスチャンの保育者もその親近感は養われます。

（3）子どもが、互いの違いを認めつつ、一緒に過ごす努力をし、そのことを喜びとするようになる。

私たちの社会には、他の人と異なる点を認め合うことよりも、共通点や同一性を保とうとする傾向があります。過度に同調することを強いるような雰囲気は、異なる者同士が、共に生き、お互いにより豊かな生き方をめざす関係づくりを妨げる原因となります。共に生きる豊かで平和な社会を創りだす喜びを、保育の様々な場面で感じられる努力を強調しています。

（4）子どもが、心を動かし、探求し、判断し、想像力をもち、創造的に様々な事柄に関わるようになる。

子どもたちをとりまく環境は、商品化された「遊び」や「学び」に満ちています。それらがもたらす効果の限度を知り、むしろ、従来からある、水や土、太陽の光に満ちた自然の中で、昆虫や、草花など動植物に接する経験など、子どもの想像力をどのようにしたら伸ばし、さらに創造的な活動に展開できるかを考えるよう促しています。

（5）子どもが、私たちの生きる自然や世界を神による恵みとして受けとめ、それらの事柄に関心を持ち、自分たちのできることを考え、行うようになる。

ここでは、キリスト教保育の立場から、私たちは、神によって創造された自然や世界をどのようにしたら守っていくことができるかを、子どもたちが意識できるよう考え、工夫する必要性を説いています。例えば、子どもたちには、世界で起きている諸問題に対して、自分たちに何ができるかを考え、献金などを通して、世界の子どもたちの幸せを願う心をもち、さらに行動する機会をもてるよう心がけることを提案しています。

（6）子どもが、してはいけないことをしようとする思いが自分の中にあることに気づき、そのような思いに負けない勇気をもち、行動することができるようになる。

ここでは、幼児期に生じる様々な葛藤がもつ大切さを認め、さらに保育者がその対応をどのようにすべきなのかが、説明されています。例えば、子どもを一方的に叱るのではなく、その子どもの思いに寄り添いながら、他の子どもの気持ちが想像できるよう導くことが進められています。

これまで説明してきた(1)～(6)のねらいは、大きく3つに区分できます。[1] (1)(2)は、主に、子どもと神・イエスとの関係の中で展開される意義に関する目標です。(3)(4)(5)は、子どもと他者（他の人、自然や世界の様々な事柄）と

の関係における意識や行為、態度について目指すべき点が示されています。(6)は、子ども自身の内面について説明しています。

これら(1)～(6)は、先述のキリスト教保育の説明にある前半部分、「子ども一人ひとりが～育つために」の内容を分節化したものです。特に、(1)(2)は、子どもが神からいのちを与えられ、恵みの下で育てられること、イエスを通して神の愛に気づくことによって導き出されるねらいを表しています。(3)(4)(5)(6)は、主に「自律的な人間」が目指す内容です。言い換えると、キリスト教保育において、神の恵みの自覚と他者との共存が自律的人間を育てるために不可欠な条件と捉えられます。そして、キリスト教保育が目指すものは、神の愛を自己と他者との中で展開する営みの基盤づくりと言えます。

以上のようなねらいが、さらに保育の中で実際に展開されるためには、クリスチャン、ノンクリスチャンを問わず、すべての保育者のキリスト教理解が深められる必要があります。特に、(1)(2)における神と子どもとの関係を理解するには、私たち保育者も子どもも、一人のかけがえのない人間として神に愛されていることを自覚する点が重要です。それは、天地創造物語をはじめとし、聖書全体によって支えられる人間理解です。このような理解をさらに深めていくためには、キリスト教を日頃から学び、理解を深められる教育的な環境を整えることが大切です。

3．クリスチャンと「キリスト教シンパ」

一般的に、クリスチャンと言うと、キリスト教信者のことであり、キリスト教信仰をもって教会に属する者と考えられています。新約聖書の使徒言行録の11章26節に、「アンティオキアで、弟子たちが初めてキリスト者と呼ばれるようになった」とあります。そこでは、人々が弟子たちを呼ぶ言葉として使用されたことが、記述されています。専門書によりますと、「クリスチャンと言う語は、初めあまり評判の良くないセクトの呼称として用いられたらしい」[2]（使徒11：26、Iペトロ書4：16他）そうです。クリスチャンという呼称は、すでに2世紀ごろから、キリスト者当人によって、「弟子」や「兄弟」の代わり

に用いられたと言われています。[3] 結論として、クリスチャン（キリスト者）という言葉は、呼称にしろ、自称にしろ、他の宗教や異教徒と区別する機能をもっていたことがわかります。[4]

このような意味から判断できることは、クリスチャンという言葉は、その起源から複数の信者の集まりを指し示す言葉であったことです。クリスチャンと教会の形成は、切っても切れない関係にあることがわかります。

さて、教会のもととなる言葉は、「集会」（エクレシア ekklesia）および、「主に属する」（キリアケー kyriake）に由来すると言われています。「教会とは神によって呼び集められた礼拝する者の集まりである。」[5] ここで定義されている「礼拝する者」には、キリスト教信仰を自覚していない者も含まれていると考えられます。教会が、「キリストのからだ」（Ⅰコリ 12：27、エペ 1：23、コロ 1：18）や「聖霊の宮」（Ⅰコリ 3：16、Ⅰペテ 2：5）と比喩的に語られるように、教会には本来、多様性と広がりがあります。私は、教会が決してクリスチャンのみで構成される集会ではなく、様々な人に開かれた裾野をもっているのではないか、と考えています。

日本を代表する神学者、熊野義孝は、「教会はキリスト教信仰を規制する理念であるとともに、現実的には歴史的な存在であるから、（略）＜教会とは何か＞という自己反省的な問いが、神学的に絶えずくりかえされる。」と言及しています。[6] この「自己反省的問い」は、加藤常昭においても別の形で表現されています。彼は、「教会は、存在論的ではなく、「宣教の使命を果たす機能において捉えられるべきである」。そして、新しい教会理解と実践に学ぶことの意義を唱えているのです。[7] つまり、クリスチャンは、教会の本質に属し、教会とは何かという自己反省的な問いを伴いながら、常に「新しい教会理解」によって規定されねばならない、と主張します。教会とは何かとクリスチャンとは何かという 2 つの問いは連動しているのです。加藤の指摘に沿うならば、クリスチャンの規定は、教会理解に依存することになるでしょう。

さて、キリスト教保育を支えるノンクリスチャンの保育者に共通する特徴は、「教会に深入りしない」（奥田）ことです。言い換えれば、彼らは何らかの理由で積極的に教会に行こうとしません。その代わり、例えば、一人で聖書を読

み、祈ることを大切にし、個人的にキリスト教を信じている（自称「クリスチャン」）と考えています。このような人たちのことを「キリスト教シンパ」、もしくは「キリスト教シンパ層」と呼びます。彼らのもつ信仰は、教会の公の場で告白されたものではなく、個人的な、キリスト教に対する、またはイエス・キリストへの思いがベースとなっていると考えられます。

この個人主義的なキリスト教信仰について、神学者E.ブルンナーは『キリスト教と文明』の中で、次のように批判しています。彼は、「個人の人格と共同体とは、キリスト教の神の観念の中だけで一致する」[8]と述べた上で、理想主義的な人道主義（プラトン哲学）は、「貴族的な教え」であり、「少数の小市民の生活観念にすぎない」としています。彼はまた、このような人道主義を基礎とした個人主義的社会では、共同体の形成は困難である、と指摘します。[9]つまり、自分一人で聖書を読み、キリストを信じるだけではよろしくない、キリスト教は、お互いに愛し合うことを大切にし、人と人とのつながりや共同体、そして、それは教会をつくっていくものだと理解できます。

以上の説明からわかることは、クリスチャンの定義や意味は、結局のところ、教会とは何か、教会をどう捉えるかにかかっていると思われます。

先ほど紹介した「キリスト教シンパ（層）」は、実は、今から50年以上前の、松村克己の論考[10]にすでに登場しています。松村は、「シンパ層」を次のように定義しています。「キリスト教並びに福音の真理に対して理解と同情をもち、その協力者となる者」。[11]彼によりますと、シンパ層は、キリスト教と異教世界を結ぶ「緩衝地帯」であり、「転換の場」を示しているといいます。シンパ層の存在は、キリスト教教育を伝統的な信徒訓練、信仰教育と狭義に規定する観点からは、認識できません。何故なら、その立場では、シンパ層は、求道者と同義となるからです。むしろ、「キリスト教と異教との接点に立つ人間」の認識において、シンパ層の概念は、伝道と教育の対立的かつ相互的関係から生まれてきた言葉でした。[12]

半世紀も前の概念を、なぜ、わざわざ今日取り上げる必要があるのでしょうか。そもそも、シンパ層を求道者のまま捉え、クリスチャンになることを期待

する一般的な伝道の在り方を推進することが、教会形成においてもきわめて健全な発想でしょう。特に、バルト神学の影響の大きい日本のプロテスタント教会ではその傾向が強いのではないでしょうか。なぜなら、バルトの教会論の特徴の一つは、教団に属するキリスト者になることが重要であり、「個々の信仰は、教団に参与することによってのみ信ずるもの」である、と捉えられるからです。[13] しかし、キリスト教保育連盟報告書にあるような、キリスト教保育の現状において、報告書の責任者、奥田和弘教授が指摘するように、「保育者の違いがキリスト教保育の実践を豊かなものにすることが願われる」のです。[14] 奥田教授は、その文章で、①未信者、信者の協働　についてキリスト教保育の課題として触れています。そこでは、「キリスト教に関心はあるが、教会には深入りしない、キリスト教シンパともいえる青年層がキリスト教保育を担っているともいえる。」（下線部引用者）と言及しています。彼は、「保育の神学」の形成を構想していますが、具体的な理論化は、今後の課題です。彼の文章の最後に、「神学教育の場と保育者養成機関、保育の場の協力が求められている。」[15]（下線部引用者）とあります。私は、この協力の中核に教会が位置づけられると考えています。

さて、キリスト教シンパの「シンパ」は英語の「シンパシー（sympathy）」または、「シンパサイザー（sympathizer 同調者）」からとってきたものですが、それは、ある種、キリスト教と自分との微妙な距離を残します。その距離感は、実存をかけた参与、コミットメントを伴わず、自分の側に自由な余地を残しておく、中途半端な心情、ナイーブな感情を内包しているようにも思われます。もし、そうであるならば、このような頼りないシンパ層に、これからのキリスト教教育・保育の発展を期待すること自体、無理な願望でしょう。しかし、このシンパ層こそ、キリスト教教育に不可欠な重要なパートナーであると考えられるのです。

4.「望ましい」保育者像

秋田喜代美（東京大学大学院教授）は、幼児教育の専門家としてある新聞に「保育の質を問う」というコラムを載せています。（「保育の質を問う⑬幼児に

育てたい言葉の力」日本教育新聞 2009 年 6 月 1 日）

その中の一つを紹介いたします。

> 言葉は自己を形作り、自己がその子らしい言葉や語り口に表れてくる。言葉の力が最も発揮されるのは、創造的な遊びに挑戦したり、仲間との暮らしの中で子どもなりの社会的責任から発言する場面である。（略）

これは、子どもが自分自身を意識したり、人格を形成する過程で言葉の役割がどれだけ大事であるかを示すと同時に、どのようにして言葉が生き生きしてくるのか、その場面としてもつ遊びと仲間の大切さを説いていると私は解釈しています。また、「ことば」が、ここでは子どもの言葉の意味ですが、保育者のもつ言葉の側面も間接的に指摘されているようにも思えてなりません。

つまり、遊びや仲間との関係の中で育つ子どもの姿を、他の人に説明することは、専門性がなければできないことだということです。元気にのびのび遊ぶことの大切さは、常識的に理解できたとしても、それが、自己形成にどのようにつながっているかを、他の人に説明する、そのような「言葉の力」を保育者が身につけなければなりませんよ、と言われているように感じます。

> 様々な人の声を聴き、それを取り込み、他者の言葉を半ばわが言葉としていく学びの生成過程、他者の言葉を取り込んで自分の思いと擦り合わせることで心の中に生まれる自己の言葉が思考を形成していく。この応答と発話の連鎖が意味あることだという言語観こそが、これからの協働し学び合う関係の基盤を形成する。

これは、あくまで大学教授の解説ですが、保育者も自分なりの表現で同様の内容を現場で実感していることでしょう。それをどう説明できるか、がプロフェッショナルとしての力量だと思います。

専門性とは、知識と技能、経験と確信を兼ね備えていることであり、難しい言葉を並べて煙に巻く技術に長けていることではありません。本当に理解でき

ている内容は、子どもにもわかるように説明できるはずなのです。私たち保育に関わる者に必要なのは、大学教授と子どもの言葉の間にある言語を豊かにすることなのです。

ドナルド．ショーンの専門家「反省的実践家（the reflective Practitioner）」の考えは、保育者にとって、日々の実践をふりかえり、さらにそれを次の保育にいかしていく姿勢を大切にすること、普段からやっていることそのものが、実は、保育者としての「専門性」を確保することと同じである、と解釈できます。いわゆる「ふりかえり」は、過去に培った経験が、現在行われている実践を通してもう一度見直され、未来に生かすために「再構築（reconstruction）」される、というアメリカの教育哲学者J．デューイの理論（反省（Reflection））をベースにしていると考えられます。

さて、「キリスト教保育指針」では、どのような専門家が描かれているのでしょうか。一つの例をあげてみましょう。一昔前になりますが、2000年の指針を解説したハンドブックには、「望ましい保育者像」が掲げられています。

> キリスト教保育の場に遣わされた保育者は、教会の礼拝出席を大切にすることが求められます。このことは、キリスト教信仰に基づいた保育の場につかわされたわけですから、当然ともいえるでしょう。（長山　篤子）（キリスト教保育連盟（2003）キリスト教保育ハンドブック、p.25）

ここで示されている日曜日の礼拝出席によって期待されていることは、キリスト教信仰を求める「求道者」としてであり、最終的にクリスチャンになることを目指している、あるいは期待していることと言えるでしょう。私が今回、未信者とノンクリスチャンを区別して用いている理由の一端はここにあります。

さて、この夏にバプテスト保育連盟の全国大会が伊豆の天城山荘でありました。2泊3日のプログラムで講演者として呼ばれてお話しました。講演のアン

ケートの中には、おそらく牧師園長先生からのものと思いますが、「主任はクリスチャンであるべきでしょうか。」「クリスチャンでなければキリスト教保育はできないのでは？」といった、従来からの「望ましいクリスチャン保育者像」が散見されました。しかし、クリスチャンになったから、キリスト教保育者の専門家になったわけではありません。素晴らしいキリスト教保育を実践するノンクリスチャンの保育者は、現に存在しますし、形骸化したキリスト教保育しかできないクリスチャンの保育者も存在するでしょう。個人における信仰の問題は、決して強制してはいけない課題として扱うべきだと思います。けれども実際には、参加者の一人の若い保育者は、この研修会が終わった後は、「クリスチャンにならなければいけないんだ」というプレッシャーを感じていた、とアンケートに記しています。

今回の新キリスト教保育指針の第5章に、「保育者として生きる」があります。そこには、5つの項目があり、最初の1．礼拝と保育者では、「礼拝に出席することを通して、教会に集う人々とともに成長することを願っている」と書かれてあります。7年前のハンドブックにあるような、(教会の礼拝出席は)「当然ともいえるでしょう。」という表現とはずいぶん異なっています。これは、ノンクリスチャンの保育者が神の導きに主体的に気付くことを期待する姿勢に変わったとも言えますし、牧師園長からの強制的なアプローチを控えてほしいことを示唆していると考えられます。教会に行き、礼拝を守るという点は、大きく変わっていませんが、それ以上に、この章で重要なことは、園の中で子どもとともに礼拝を守ること、そして祈ることです。さらに、子どもの「今」を大切にするよう意識して保育することです。「保育者は、子どもの心に寄り添い、子どものことばに耳を傾け、共感しつつ、子どもと信頼感を育んでいく。」(p.101) そして、この信頼は、「保育者が神へ信頼を寄せる姿を通して、子どもに培われる」とあります。クリスチャンの保育者であれば、このことは自然なことかもしれません。しかし、キリスト教シンパの保育者は、逆に、「子どもから保育者へ」(p.21) にあるように、神の恵みを子どもの背後に見出す感性が磨かれることによって、神の愛に気づかされます。

ここで、子どもから学ぶキリスト教信仰の一例をご紹介いたします。

自由遊びの中で死んでしまった虫を子どもたちが持ってきました。
「先生、土に埋めてあげようよ」
というので一緒に行いました。終えてすぐに行こうとした私に、
「先生、お祈りして」
と子どもたちから自然に声があがりました。このとき、子どもたちの中にしっかり「神様」がいるのだな、と感じました。
礼拝だけではない、すべてがキリスト教保育の上に立っていると感じた瞬間でした。

（[東京、M 幼稚園]バプテスト保育連盟研修会 2010 年 8 月 19 日アンケートより）

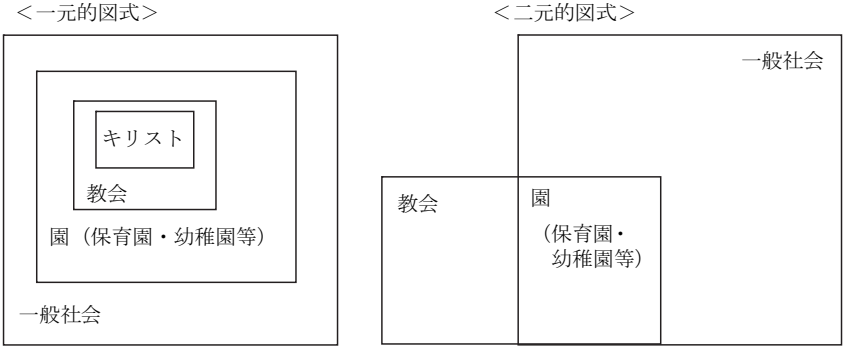
私は、天城山荘の講演の中で、園の中での礼拝には 2 種類ある。一つは時間や場所が設定された幼児礼拝であり、もうひとつは、形にはならないけれども、生活そのものの中にある礼拝である。と説明しました。生活が礼拝である、とすることは、神学的にはおそらく問題があるのでしょうが、教育学的に考えますと、礼拝を中心に、またそれを土台として他の活動が展開することは、むしろ自然です。このような私の説明を受け取って下さった若い先生が、先ほどのエピソードを書いて下さいました。

5．キリスト教的空間

5.1　2 つの原理

キリスト教シンパは、キリスト教への思いを強く持ちながらも、その実質的空間・場所、交わりとしての教会に入ることを躊躇することが特徴です。一般社会の中で、個人として生活し、縛られない状態を保とうとするのです。私たちの世界を教会と一般社会という 2 つの世界に分けることを、あえてそうします。例えば、クリスチャンにとっては、教会の内と外としてこの 2 つの世界が構造化できるでしょう。これは一元的図式モデルで便宜的に表現いたします。

それに対して、キリスト教シンパ層にとっては、「聖と俗」といっては言い過ぎかもしれませんが、教会を含めたキリスト教の世界と政治・経済など一般社会の二元的図式のモデルと捉えられるでしょう。



かつて内村鑑三は、「2つのJ（Jesus, Japan）[16]を愛する」といったと言われています。これは、正確ではなく、「貴ぶ」が正しいのです。この言葉は、1921年に「聖書ノ研究」という内村が編集した雑誌に掲載された、一般読者向けの広告文の中にあります。彼が著書『代表的日本人』を英文で著す理由とした書いた文章が元になっています。内村は、Japanを貴ぶことへの義務を示そうとしたことがうかがわれます。

さて、キリスト教の幼稚園や保育園は、教会と一般社会の境にあります。2つの原理Jesus, Japanを含みもった保育・教育機関です。それは、いうまでもなく、保育の原理も実質的に2つの基盤を併せ持っていることを意味します。

例えば、一般社会の中にある幼児教育機関・児童福祉施設としての園の原理には、「幼稚園教育要領」や「保育所保育指針」があります。他方、教会の「教育的機能」（高崎毅）を担うキリスト教の園として、「キリスト教保育指針」があります。この2つの原理を並列に扱うことはできません。キリスト教の園は、教会と同じように、第1にキリストを土台としなければなりません。キリスト者である保育者が大多数の時代は、それで十分問題なくやっていけたのではないでしょうか。ですから、「地の塩」であるキリスト者は、現実世界のただ中

にありつつ、その世界に溶け込み、世界の質を健全に保つ役割（ミッション）を自覚できました。他方、「世の光」として、正義・悪を明らかに照らし出し、進むべき道を照らす先駆的な役割も果たしてきました。多くの園で行われている「全人教育」は、大正時代に、玉川学園を創設し、クリスチャンになった小原国芳の発案でした。今日の一般社会にとっても大きく評価される人間形成の考え方だと思います。

さて、教会と園が同じ原理にたって社会をリードしてきた時代は、残念ながら過ぎ去ってしまったように感じます。教会と園の人的交流も少なくなり、世代交代も進みました。クリスチャン保育者の高齢化や減少も深刻な課題です。

園と教会とのつながりが薄くなり、クリスチャンも少なくなると、どのようなことが起こるでしょうか。私どもの園でもしばしば感じるのですが、キリスト教保育の固定化や形骸化が生じるのです。聖話の深い解釈ができず、マニュアル化されたテキストをこなすだけになったり、聖句の意味や歴史的背景を理解できず、園児に機械的に暗記させたりすることも生じます。クリスチャンではない教師は、教会で新しいキリスト教の息吹にふれる機会がありません。保育や子ども、社会の変化に敏感であっても、教会やキリスト教のことは、園長や主任にまかせていればよい、そのことは別物と考えがちです。カリキュラムの観点から考えると、幼児礼拝が中心となってすべての保育が回っています。その礼拝が形骸化すると、キリスト教保育の中心部分が欠けた「からまわりの保育」になってしまう危険があります。

しかし、現実の保育者の仕事は、モンスターペアレントやクレーマー、発達障碍の子どもへの対応、地域への貢献、様々な日常の業務に忙殺されています。自主的に教会に行き、そこでエネルギーを充電すればよい、という考えは確かに正論です。しかし、そこに行きつくまでの途中の段階が、もっと大切にされなければ、若い保育者は悲鳴をあげてしまうのではないでしょうか。実は、悲鳴はベテランからも上げられました。あるベテラン教師が、私に相談にきました。教会で日曜日、静かに礼拝ができない。CS の奉仕があり、また、教会の役割があり、一日中教会で仕事をし、ゆっくり神様と向き合うことができていない、と嘆いていました。この方は、伴侶がノンクリスチャンであるため、日

曜日教会に来ることも、家族の理解なくしては難しいことでしょう。伴侶への申し訳なさがありながら、それを解消できるだけ魂が満たされればいいのですが、そうともいかないジレンマに、そうとうまいっているように私には見えました。教会の仕事のほとんどすべてが、日曜日に集中している現状を背景として、働き人の少なさが、さらにその忙しさに拍車をかけているようです。そこに、キリスト教の園から若手の保育者が教会にいけば、さらに彼女ら・彼らに「働き人」、すなわち新しい労働力としての期待が、一気に高まることは自然だと思われます。この状態から抜け出すには、どうしたらよいのでしょうか。

5.2　教育的機能

そこで、私なりに考えたのが、幼稚園や保育園が「キリスト教的空間」として捉え直される必要性です。この空間は、教会の外にある神の存在を感じさせる空間であり、キリスト教の学びの空間です。50 年以上前に神学者たちがいった「教会の教育的機能」としての幼稚園や学校、という考え方は、主に、子どもを教育することを目的とした園・学校の機能を指していたと思われます。この教育的機能について、30 年以上前に、ウェスターホフが「宗教的社会化（religious socialization）」の概念を提示しました。詳細は割愛しますが、この概念には、教育学的に Jackson の潜在的カリキュラム（hidden curriculum）の考え方、神学的には、ティリッヒの導入教育（inducting education）の影響があると考えられます。

教育的機能について、ここで私が指摘したいのは、従来の子どもに対するものではなく、むしろノンクリスチャンの保育者や保護者向けの教育的機能です。

園児の卒業を前に、ひとりの母親が、図書室の陽だまりを見てこう言いました。「舞鶴（幼稚園）の神様がいる」。この図書室は、子どもにとって神を感じる場になっていて、そのことを保護者自身も心底自覚している、と感想を述べてくれました。私は、幼稚園・保育園は、大人の中に生きている「子ども」の感性が覚醒される場であると思っています。

大人の中にある子どもとの関連ですが、私は、以前、運動会は誰のためにあるのか、を考えたことがありました。そこで得た結論は、聖路加国際病院の院

長である日野原重明さんがコラムで紹介した、古代ギリシアの哲学者プラトンの言葉です。「老人は子どもや若者の若い肉体の躍動を見ることで自分にも過去にあった青春を心に再現できる」。そもそも、運動会は、初代文部大臣の森有礼が兵式体操の成果を公にするために始めたもの、と言われています。しかし、現実として、今日の運動会は、園の保育の成果を保護者に披露する場となっています。私は、子どものための運動会で有るべきなのは、もちろんですが、それとは別に、保護者だけでなく、なかばそのスポンサーにもなっている祖父母の方々が、孫の元気な姿を見て自分も元気に、より長生きしようという活力を与えられている事実に着目しています。私どもの園では、珍しく、祖父母のための競技も用意されていて、おじいさん、おばあさんもお互い負けずと、玉入れ競争に参加しています。幼稚園・保育園・小学校の先生たちが、しばしば年齢よりもずっと若く見られるのも、幼い魂に常に触れているからではないか、と思っています。このように、園は自分がかつて子どもだった頃、若かった頃を大人に思い出させ、魂を活性化させる機能が働く場である、とも言えるでしょう。

園は、大人達に自分の中にある子どものようなもの、子どもの特性を気付かせる場でもあります。他方、先ほどの二元的モデルにもあるように、園は、一般社会と教会との関係で捉えることもできます。この関係について、古い研究（1967）になりますが、天皇制の分析で著名な武田清子教授の言葉に注目したいと思います。彼女の著書『土着と背教』の中で、「キリスト教受容の形態」[17]がモデル化されています。詳細は、省きますが、彼女は最後に次のように述べています。

> 日本の精神的・文化的土壌に福音が深く根を下ろすためには、教会内の人々のみではなくて、むしろ、こうした教会と「外」の世界との境界線上、あるいは、線の外にはみ出した領域にあって、肯定的にせよ、否定的にせよ、キリスト教のもちいきたらせた基本的メッセージを誠実に受け止め、それと自覚的に相克し、真の意味での近代化を志向し、独自な思想的課題を抱えて行き悩み、道を切り開こうとした人々の思想を、新しい観点から

積極的に検討し直す必要があると思うのである。[18]（下線引用者）

ここで興味深い点は、教会の外や境界線上の領域はどこかということです。社会一般である、と一言でいえばそれまでですが、キリスト教学校、幼稚園・保育園なども教会の内と外の境目にある空間として、最も典型的な場所と言えるでしょう。そこにおいて、「誠実に（キリスト教のメッセージを）受け止める」ノンクリスチャン教師、保育者、職員が少なからず存在しています。私にとっては、教会の外の線にはみ出した領域にあっても、キリスト教のメッセージを誠実に受け止めている人たちの存在を、大切にしたいと思っています。なぜなら、これからのキリスト教保育は、この境界線上に立つ「キリスト教シンパ層」の働きに、大きく左右されると思うからです。

5.3　空間の意味

私がなぜ、「キリスト教的空間」という哲学的な言葉を用いるのか、少し説明したいと思います。あえて「空間」としたのは、教会は礼拝堂が仮になくても人々が集まることで成立しますが、幼稚園・保育園には、子どもが自由に活動できる、ある一定のスペースが必要です。園庭や保育室など子どもたちの生命の躍動が展開される場が保証されなければなりません。これは、キリスト教の園を問わず、すべての園に共通する保育の物理的条件です。この一般的な保育空間が、キリスト教的空間に変えられることが必要です。

私が考えるには、空間の中に少なくとも２つの要素を揃えることが必要だと思います。１つはシンボルの存在です。具体的には、キリスト教であることを示す象徴や形式を指します。従来からなされていることですが、十字架やイエス、聖書物語の絵画、カレンダーなど、キリスト教を示す視覚的表現に満ちた掲示物が、幼児にとっては必要です。いくら神秘的で深遠な雰囲気を演出しても、それがキリスト教であるかどうか明確に示されなければ、宗教的空間であっても、キリスト教的空間とは言えません。子どもには、お化け屋敷ですら深遠な神秘的な異次元空間なのです。もう１つは、キリスト教的価値・倫理観を感じさせる人的環境です。これは、しばしば「キリストの香り」をただよわせる

人、と表現されます。[19]（元日銀総裁：速水氏の講演）この人的環境は、クリスチャンはもとより、キリスト教シンパも含みます。「豊かな心」「思いやり」「やさしさ」等を育むためには、園の教職員自らが、その手本を示さなければなりません。人の過ちを許したり、人のために奉仕をしたり、物事を様々な角度から見ることができたり、その他様々な心の働きは、個人の能力を磨くことによってではなく、キリストの赦しと恵みによって可能となります。そのことを園長や牧師、主任が身をもって示すこと、それを見習いながら若い保育者たちが人格的に影響を受けること、それが人的環境を整えることです。クリスチャンを単に増やせばいいということではありません。

実存哲学者ボルノーは、雰囲気（Atmosphaere）のもつ教育学的意義を唱えました。さきほどの潜在的カリキュラムに類似する点も少なくありません。幼稚園・保育園に集う子どもたちも、そこで働く教職員も、キリスト・イエスに直接つながって仕事をしている園長・牧師の存在があって、初めてキリスト教保育の空間が成立しているのです。

おわりに

最後に、キリスト教的空間を創るために、いくら環境構成をしても、イエス・キリストが語られなければ、キリスト教保育にはなりません。そのためにも、イエスの人格性（人としてのイエス）が、神との出会いのきっかけになることを大切にした保育をすべきだと思います。具体的には、幼児に話すイエスの話の意義を見直すことです。ただ、三位一体の神の存在を幼児に分かるように説明することは困難です。天地を創った神とイエスが親子関係でありながら、同じ存在であることは、歴史的にも神学の大問題（アタナシウス派とアリウス派論争）です。論理的矛盾を包み込みながら、聖書の言葉の力に信頼しつつ、キリストの愛を子どもたちに伝えようとする教師たちの努力が望まれます。

また、ノンクリスチャン保育者が、キリストと出会う契機をいかに増やすか、も大きな課題です。どこで彼らはキリストに出会うのか、教会や聖書の話の中で、と言えるかもしれません。しかし、それ以外で出会う機会もあります。それは、牧師や園長を含め、クリスチャン（保育者）との個別的、人格的出会い

です。その出会いを広げる努力は、園長からのアプローチが重要となるでしょう。どんなにすばらしい理論や空間が準備されても、それを活かす人がいなければ無意味です。クリスチャンが尊敬される、または園長牧師が敬愛される存在となることが、ノンクリスチャンの保育者にとってキリスト・イエスに近づく、最も早い方法だと思います。

（この報告は、キリスト教保育連盟主催、全国設置者・園長・主任研修会（2010 年 11 月 16 日、日本キリスト教団倉敷教会にて）の講演をまとめたものです。）

＜註＞

1　3 つの区分は，ねらい（6）を他の（3），（4），（5）にまとめ，神の恵みの自覚［(1)(2)］と他者との共存［(3)(4)(5)(6)］の 2 つに分けるよう，後日修正した。（キ保連鹿児島地区保育者研修会 2011 年 3 月 28 日）

2　古屋安雄監修（1995）『キリスト教神学事典』教文館，p. 173

3　日本基督教協議会文書事業部キリスト教大事典編集委員会編（1991）『キリスト教大事典』教文館，p. 349

4　19 世紀のユニテリアンは，キリスト教の名を拒否した，と言われている。（キリスト教神学事典（1995）），p. 173

5　ibid., pp. 148－150

6　熊野義孝, in：キリスト教大事典（1991），p. 274

7　加藤常昭, in：東京神学大学神学会編（1992）『キリスト教組織神学事典』pp. 69－74

8　ブルンナー（2001）『キリスト教と文明』（熊沢義宣訳）白水社，p. 100

9　ibid., p. 155

10　松村克己（1958）「宗教と教育―日本におけるキリスト教主義学校に関する神学的考察―」『神学研究』7 巻，関西学院大学神学部，pp. 373－402

11　ibid., p. 396

12　深谷潤（2006）「＜キリスト教に基づく教育＞に関する一考察－1950 年代のキリスト教教育理論が定期するもの－」キリスト教教育論集　No. 14，日本キリスト教教育学会，pp. 4－5

13　オットー・ヴェーバー（1967）『カールバルト教会教義学概説』（土方昭訳）明玄書房，p. 366，（バルト教会教義学　IV1，62 節 718 のテーマ）

14　キリスト教保育研究会（2006）「キリスト教保育アンケート報告」キリスト教保育

連盟，p. 113

15　ibid., p. 114

16　内村は，「代表的日本人」を英文で著する理由を雑誌「聖書之研究」No. 256 p. 49，1921（大正 10）年に掲載した。そこの広告文（「菊花薫る」）には，以下のように記述されている。「（前略）私の貴ぶ者は二つの J であります，其一つは Jesus（イエス）であります，其他の者の Japan（日本）であります，本書（代表的日本人）は第二の J に対して私の義務の幾分かを盡した者であります。」

17　武田清子（1967）『土着と背教』新教出版社

18　ibid., p. 21

19　2004 年 7 月 24－26 日に御殿場・東山荘で行われたキリスト教学校教育同盟事務職員夏期学校の主題講演において、速水優氏（元日本銀行総裁）の講演「キリスト教学校で共に働く」があった。「キリストの香り」はサーバント・リーダーシップや Calling と並んで，講演の中心的なテーマであった。（月刊　キリスト教学校教育（482 号）2004 年 9 月 15 日　キリスト教学校教育同盟発行）

西南学院大学人間科学部児童教育学科